

レーニンと宗教

霜田 美樹雄

目次

まえがき

一、レーニンのプロフィール

二、レーニンの宗教的態度

むすび

まえがき

世界でさいしよに樹立された社会主義国家たるソビエト連邦はその建国から基礎の確立に至るまでレーニンの才腕によること甚だ大であった。またそこには社会主義国家理念の形成に立ちはだかる諸困難を切り拓いてゆくべき運命を背負わされていたのである。それはソ連邦という国家が負うべき運命でもあり、同時にまたレーニンのそれでもあった。たとえば社会主義理念と宗教との対決の問題をどのようにに処理すべきかは関心のあるところである。

レーニンがこの対決をどのようにに解決しようとしたか、つまりソ連邦をしてどのような宗教政策をとらさんとしたか興味のあるところであり、そこで主動的役割を果たしたのは言うまでもなくレーニンだからである。

それゆえ、ここでは社会主義理念の形成を支えた彼の活動をアウト・ラインし、次にその宗教観とそれがどのような条件の下にできたかを検討してみたい。

一、レーニンのプロフィール

1、生い立ち

a 青年レーニン

ニコライ・レーニン *Николай Ленин* (1870—1924) は偉大なる天才、ソビエト共産党の創設者、ソビエト社会主義国家の建設者、万国労働者のリーダーであり、先達であつた。⁽¹⁾

彼は父イリア・ニコラエヴィチ・ウリアノフ *Илья Николаевич Ульянов* と母マリア・アレクサンドロヴナ *Мария Александровна, урожд. Бланк* とのあいだに生れた六人兄弟姉妹の次男として一八七〇年四月一〇日 (二二日) シムビルスク *Симбирск* (いまのウリアノフスク *Ульяновск*) で生れ、本名をウラジミール・イリイチ・ウリアノフ *Владимир Ильич Ульянов* と言つた。⁽²⁾

父は雑階級出身の知識人で、カザン大学卒業後、中等学校で数学と物理学を教え、また、シムビルスク県の国民学校々長、のち視学官となり、貴族に列せられた。教育の天職する彼は自分の仕事を愛し、それにすべての力と情熱を捧げた。⁽³⁾

母マリア・アレクサンドロヴナは医者と言う知識人の娘で無学ではあつたが才能豊かな母であつた。

このように地方における上流家庭の家庭生活と教育条件は当然のことながらレーニンはじめ六人の子供達の頭脳と

性格の発達にとって望ましいものであった。レーニンはそのような家庭環境にはぐくまれて九歳から一七歳までシンピルスクの古典中学に学んだ。

このころまでは、彼は知識人として世に尽し、小市民的な将来の生活を夢みていたようだ。⁽⁴⁾だがこのような夢を無理矢理ねじまげる運命の絆が彼を待ちかまえていたのだ。

すなわち、一八八六年と一八八七年は若いレーニンの生活にとって真に決定的な年であった。無意識なものから意識的なものへの転移が促進された。この二ヶ年の運命的な年にこの青年は一八八六年一月父の急死に会い、ついでアレクサンドル三世 Александр III, Александрович Романов, (1845—94) 暗殺未遂のかどで長兄アレクサンドル Александр Ильич Ульянов の逮捕、裁判、そして一八八七年五月の刑死に会い、また姉アンナ Анна Ильинична Ульянова の逮捕に会った。彼自身は一八八七年末古典中学を金メダルで卒業し、すぐカザン大学法学部に入學したが、学校ストライキに参加したかどで逮捕され、一八八七年一二月放校された。⁽⁵⁾そして秘密警察監視のもとにカザン県コクシュキン村に流される。ウリアノフ家は社交界から村八分にされ、世の無情を痛いほど味あわされることになるのである。もはや永久に期待できぬはかない夢への絶望とそこに至らしめた社会の機構に直面して、誰が人生観を変えずにいられようか。この試練を経て、レーニンは次第に生長してゆくのである。一八八九年レーニンはサマラへ行く。一八九一年春、秋、彼はペテルブルグ大学法学部卒業検定試験に立派な成績でパスし、学位を得た。同年弁護士資格を得てサマラで活動を開始するとともにサマラ共産主義者グループを組織化して青年たちに革命的影響を与えた。⁽⁶⁾ナロードニキ思想 народничество への反対はこの時期の彼の論文「ロシアにおける新しい経済活動」(一八九三に既にはっきりと示された。

一八九三年、レーニンはペテルブルグへ移り、さらに活動を活発化する。翌年、「人民の友とは何か」(一八九四)はナロードニキに敵対し、自己の史観を確立した好論文と言われる。⁽⁷⁾

b 流刑時代

一八九五年四月レーニンはペテルブルグ・マルキストの依頼により、一八八三年外国で結成されたロシア・マルキスト団体「労働者解放団 Освобождение Труда」とつながりを持つため国外に赴く。同年九月ロシアに帰り、ペテルブルグにあるすべてのマルキスト労働者グループを「労働者階級解放闘争同盟 союз борьбы за освобождение рабочего класса」に統一する。これは革命政党のさいしょの萌芽の一つであり彼の指導で「解放同盟」は大衆労働運動と緊密なつながりをもった。それはストライキ闘争の発展を指導し、労働者の革命意識を高揚する非合法文書を出版した。⁽⁸⁾

一八九五年一二月初め、レーニンは右の件で逮捕され、刑務所に拘禁さる。一八九七年二月彼は東方に三年の追放となる。それはシベリア、エニセイ県ミヌシンスク郡シュシェンスコエ Шышенское 村であった。

この流刑期間に彼は、レーニンをしたって流刑されたクルプスカヤ嬢と一八九八年七月一日同地で結婚した。

流刑生活は比較的自由であったので彼は多くの友と語り、書物を読み「ロシアにおける資本主義の発達」(一八九九)をはじめ三〇以上の著作を書いた。⁽⁹⁾ この活動にクルプスカヤが積極的に貢献したことは論を俟たない。

一九〇〇年はじめ流刑満期となる。かれの不在中ロシア社会民主主義者の組織は事実上解体していたので、かれは社会民主主義者の理論的組織的な重要手段として、全ロシア的マルクス主義の大衆政党が出現すべき旨説いて回った。そしてこれを具体化する新聞、雑誌の創刊にふみきるため、各地のマルキスト達とつながりを結び、支援方につ

いてとりきめた。各種の政治的迫害から帝政ロシア国内での刊行は不可能であったので、外国で印刷のうえ持ち込むため、同年七月レーニンは国外へ発つ。

c 亡命生活

かれのはじめての亡命生活 *эмиграция* がはじまったのである。そして同年末機関紙 *クイスクラ* *Кукра* 第一号が出た。レーニンこそは *クイスクラ* の組織者であり、イデリストであり、実際の指導者であった。レーニンの *クイスクラ* はマルキスト党への闘い、経済主義者の破壊、ばらばらの社会民主主義者を統一し、*РСДРП* 第二回大会準備のため決定的役割を果たした。⁽¹⁰⁾

第一号紙の論文「わが活動の緊急課題」でレーニンは強固な組織的政党の必要性を示した。それなくしては労働者階級は自らの大いなる歴史的使命たる経済的な人民を解放することはできないとした。⁽¹¹⁾

しかし党建設の課題は信ぜられぬほど困難であった。まずそれに残忍に迫害する帝政警察がせまった。それと同時に地方党组织の派閥性、家内工業的産業の沈滞性、後進性も克服されねばならぬ。このような状況の中で一九〇一年五月 *クイスクラ* 第四号にレーニンの「何からはじめるべきか」 *Что начинать?* の論文が書きはじめられた。そこで彼はマルキスト党建設の具体的プランを与え、これが後に有名な著作『何をなすべきか』 *Что делать?* (一九〇二)に発展する。

レーニンの労作『何をなすべきか』はレーニン自身にとっても、社会主義理論の歴史自体にとっても巨大な意義をもつ。

この著作でレーニンは後進国ロシアにおいて経済主義が日和見主義、西欧追随主義であることを指摘し、経済主義

に敵対する闘いを宣し、革命の前衛的勢力としての党の組織と役割をあきらかにした。⁽¹²⁾

それは革新諸政党勢力の結合、政党メンバーの獲得と教育、それを単一かつ鉄の規律をもったマルキスト党組織とそれによる革命戦術に大衆を結合することであった。この時期彼はいくらかの自己の著作にレーニンという署名をしたのであった。⁽¹³⁾

彼は「イスクラ」でロシアにおけるマルクス主義政党創立の地ならしをし、かくて PCJPT 第二回党大会は一九〇三年に開かれたのである。

周知の如く事実上の創立大会であったこの第二回党大会はまた党組織上の問題、党規約をめぐってポリシエヴィキとメンシエヴィキに対立し、分裂するときでもあった。

レーニンは「イスクラ」がその後メンシエヴィキの握るところとなるにおよんで、ポリシエヴィキをひきいて一九〇四年八月スイスにおける協議会で活躍し、同年末、同派機関紙「フベリョート Bureper」を刊行し、党ポリシエヴィキ派再建への闘いと第三回大会準備に尽力した。

一九〇五年一月ロシアで第一次革命はじまる。一月九日首都ペテルブルグで生活困窮の歎願をツアーにするため家族とともに平和の行進をする労働者のデモに銃撃がなされた。これで三〇〇人以上が殺傷され、血塗られた日曜日の夜、労働者たちは闘いによってのみ自らの権利を克ち取りうることを知った。

この時点でレーニンはこれを革命のはじまりであるとして、革命において党の戦術路線を決定するため可急の速やかに党大会召集の必要性をのべて、大会準備、綱領案を作成し同年五月 PCJPT ポリシエヴィキ派第三回党大会が成立した。大会はブルジョア民主革命とその成長転化としての社会主義革命の完全勝利に予定されたポリシエヴィキの

戦術論をきめた。すなわち、大会で採択された決議はプロレタリアの役割は革命のリーダーとして農民との団結と、リベラル・ブルジョアとの絶縁の必要性を主張した。⁽¹⁴⁾

同年一〇月プロレタリア運動の巨大な勢力と帝政支配権の急激な対立は表面化した。政治ストの嵐の日、革命の闘いの火はペテルブルグ、モスクワその他の都市に労働者代議員ソビエトが形成された。⁽¹⁵⁾ ここにおいてツアーの専制政治に敵対して大衆の革命的闘いを指揮し、武装蜂起を準備するなど広汎な組織活動を展開したのはトロツキー、Лев Давидович Бронштейн (Троцкий) であり、一月初め革命参加のため入国したとは言えレーニンはこの時点ではトロツキーに比肩しうるほどの貢献もなかった。

ところで一〇月騒擾はツアーの一〇月立憲政治の宣言を生んだが、ブルジョア民主化は偽装で保守の反動攻勢は激しく、一二月のプロレタリアート蜂起は敗北を喫したのである。

以後はストライピン体制の成立を中心としはポリシエヴィキの活動地盤は国内においても狭少化され、レーニンはもっぱら国外においてこの再建のため奔走することになるのである。

2、権力掌握

a 四月デーゼ

一九一七年二月末、ロマノフ帝政崩壊二月ブルジョア民主主義革命が勝利し、ここにロシア臨時政府と革命をなしとげた労働者兵士代議員ソビエトの事実上の二重政権「Воспачи」が樹立されたのである。

三月二七日レーニンはスイスを発ち、四月三日ペトログラードに到着した。レーニンの到着は革命にとっても党にとっても重要な意義を持つ。四月四日朝、彼はタウリダ宮に出て、ポリシエヴィキ集会で演説し、革命的プロレタリ

アの課題についての主張をのべた。これがレーニンの有名な四月テーゼであり、そこで彼はブルジョア革命から社会主義革命への過渡における党の闘争プランを説明し、最良の形態としてのプロレタリア独裁のソビエト共和国を作る結論を示し、そのためまずすべての権力をソビエトへ *Все Власть Советам*、このスローガンを高唱した⁽¹⁶⁾。だがこの時期におけるボリシェヴィキの多数にとってさえも、この主張は破天荒なものとしてうけとられたのであった。

四月二四日ペトログラードで第七回全ロシアボリシェヴィキ協議会が開かれ、そこでレーニンは当面の問題、農業問題、党綱領の改訂問題などについて報告を行ない、協議会は戦争、平和、革命の問題についてレーニン路線に従い社会主義革命勝利への前進することになった⁽¹⁶⁾。この四月協議会の決定で指導されたボリシェヴィキ党は大衆組織と大衆の政治教育で大きな活動を発展させた。この活動の中心はレーニンおよびその仲間たち、スターリン И. В. Сталин、スズハドロフ Я. М. Свердлов、モロトフ В. И. Морозов、カリニン М. И. Калинин、ジェルジンスキー Ф. Э. Дзержинский、オルジニキーセ Г. К. Орджоникидзе などであった⁽¹⁷⁾。

一九一七年六月第一回全ロシア・ソビエト大会が開かれ、そこでレーニンはボリシェヴィキの立場から、この行き詰りを打開するためすべての権力をソビエトの手中に移すことによってのみ国家は救われるとした。

六月一八日ペトログラードの多数の労働者兵士はボリシェヴィキのこのスローガンの下にデモをしたが臨時政府はこれを武力鎮圧し、これでボリシェヴィキは強い打撃を与えられ、大衆への勢力は一挙に後退した。七月七日臨時政府はレーニン逮捕の指令を発し、また非合法状態になった党は深く地下に潜行した⁽¹⁸⁾。

七月末ペトログラードで第六回ボリシェヴィキ党大会が非合法に開かれ、レーニンは人を介して党を指揮した。この七月から一〇月革命で彼は約六〇〇のパンフレット、論文、手紙などを書き、そこで彼は国家の変動を、階級的諸

勢力の相関々係を分析して、その時点における武装蜂起の党方針に正当性を与えた。

なかでも彼の著書『国家と革命 [Государство и Революция] (一九一七)』¹⁸⁾はマルクス、エンゲルスの見解を典拠とし、プロレタリア国家とその独裁について、マルクス学説をさらに発展させたし、それは前述の『何をなすべきか』(一九〇二)とともに画期的な名著であると言えよう。

八月中旬コルニコフ Л. Г. Корнилов 將軍は軍隊をひきいて臨時政府首班ケレンスキー А. Ф. Керенский に叛旗をひるがえす。ケレンスキーはこれを労働者兵士の協力により鎮圧した。この事件でボリシェヴィキの労働者兵士への勢力は七月敗退いらいの劣勢を一気に挽回し、以後同派への支持勢力は次第に増加し、革命へと前進するのである。

b 革命の成功

一〇月七日党中央委員会の決定により、レーニンはペトログラードに非合法に潜行す。同一〇日同派の歴史的な中央委員会議が開かれ、そこでレーニン提案の武装蜂起についての決議が採択された。同一六日拡大党中央委員会議で確認された。²⁰⁾

一〇月二五日レーニンは蜂起を直接指揮するためスモリヌイ Смольный に到着する。武装した労働者、革命的兵士は停車場、郵便局、電信局、国立銀行などを占拠した。同夜から二六日にかけて冬宮を襲い、臨時政府要員を逮捕した。

レーニン起草にかかる戦時革命委員会の「ロシア市民に告ぐ К гражданам России」のメッセージは、臨時政府が廃止され、国家権力はソビエトの手中に移管されたことを宣言した。それは二五日夜スモルヌイでの第二回全ロシ

ア・ソビエト大会で示されたのである。

これにつづいてもっとも焦眉の急であった平和の問題について、関係方面は休戦提案することが、土地についての布告案がともに熱狂的に採択された。⁽²¹⁾

ソビエト国家の最高首脳としてレーニンはあらゆる面で若いソビエト共和国を指揮した。彼は政権の政治的な基本的諸問題を練り上げ、したがって基本的布告の作者であり、発言者であった。ソビエト国家のすべての機関はレーニンの指導のもとで組成された。⁽²²⁾ 基本的な組織である人民委員会議から、社会主義的国民経済の企画、実施のさいしょのプロレタリア機関たる国民経済最高会議 ВСНХや反革命やサボタージュと闘う全ロシア非常委員会 ВЧКに至るまでレーニンの配慮になったものである。

一九一八年一月第三回全ロシア・ソビエト大会でレーニン提案の「労働者と被搾取人民の権利の宣言」 Декларация прав трудящегося и эксплуатируемого народа が承認され、また臨時政府らしいの制憲議会が廃止されて、ソビエト国家組織の本格的発動がなされたのである。

c 戦時共産主義

ところでソビエト政権の当時の状況からロシアがドイツ、オーストリアと戦争状態をつづけて行くことは出来なかった。そこで平和交渉が一二月三日ブレスト・リトウスク Брест-Литовск ではじめられた。交渉に不満のソビエトに対しドイツは進撃再開をもって応じたので二月二三日党中央委員会はレーニンの提案により、ヨリ敵しい条件で迫ったドイツの平和提案を受諾調印することを決議した。⁽²³⁾

三月初め第七回拡大大会が開かれ、この決議が諒承され、またかねてロシア社会民主労働党（ボリシエヴィキ）

РСДРП(6) をロシア共産党 (ボリシェヴィキ) РКП(6) と改称するというレーニンの提案を可決した。⁽²⁴⁾

さて、同じく同大会で首都をペトログラードからモスクワに移転することがきまり、三月一日党中央委員会とソビエト政権はあわただしくモスクワに行った。⁽²⁵⁾

一九一八年夏、外国の干渉戦争がはじまり、ソビエト政権はまさに双葉のうちに芽をつみとられんとした。レーニンは「すべてを戦線に *Всё для фронта!*」というアッピールを出して英米仏干渉軍白衛軍に敵対する闘いですべて社会主義勢力を結集し、戦線統後における英雄的成果をなしとげるよう労働者農民を鼓舞激励した。このさ中、すなわち、八月三〇日、レーニンはエス・エル左派のテロの凶弾に傷つき仆れた。⁽²⁶⁾

この頭部に打ちこまれた銃弾が以後レーニンを悩まし、激務をしばしば中断して病床に伏せさせ、その度合と期間を拡大し、ついに死に至らしめるのである。

一九一九年三月第一回共産主義インターナショナル (第三インター) がモスクワで開かれ、諸国労働者代表が列席する中で、レーニンはプロレタリア独裁は労働者大衆の利益のため必須であること、それを経てのみ共産主義理想社会への人類の道は拓けるとのテーゼをコミンテルン政綱の基礎としたのである。

同月第八回 РКП(6) 大会開かる。大会はレーニンを長とする綱領委員会が作成した新しい党の綱領を採択した。それは社会主義の勝利に向けての闘いにおける党の基本的課題をきめたものであった (ブハーリン的修正の反対)。⁽²⁷⁾

一九一九年春コルチャック *Колчак* 軍はボルガ河まで進み東方戦線はもつとも重大であった。レーニンは「東方戦線を救へ」と檄をとばし、同年八月赤軍はフルチャック軍から全ウラルを解放し、シベリアを解放しはじめた。⁽²⁸⁾

一九二〇年第九回党大会・中央委員会年次報告でレーニンは外国干渉軍、白衛軍に敵対勝利した赤軍とソビエト共

和国の上における共産党の偉大なる組織的役割を強調し、ついで経済体制の諸問題に党大会が配慮することを指示した。⁽²⁹⁾

d ネット政策

一九二一年三月 PKT (6) 第一〇回大会が開かれ、レーニンの提案により農産物徴発 *Погрabs:пкт* を糧食税 *Погрabs* へ切り替えること、つまり新経済政策への移行についてそれぞれの決議をした。⁽³⁰⁾ 外国干涉軍、白衛軍との闘いに勝利し、戦時共産主義から平和経済体制への移行にさいして新しい経済的基礎づけが必要であった。第一〇回大会後レーニンは新経済政策の要点を説明して回り、その実施を指揮した。

一九二一年四月、レーニンは「糧食税について」というパンフレットを書き、モスクワ・党活動分子の集会で報告を行ない、五月、全ロシアボリシェヴィキ党協議会で、第三インター会議で、同年末全ロシア・ソビエト大会でその報告を行なった。⁽³¹⁾

一九二二年三月レーニンは「戦闘的唯物論の意義」を書き、理論戦線とくに哲学の面における共産主義者の課題を示した。彼はどんなに最新流行の哲学衣裳で仮装しても、西欧のそれはブルジョアの従僕たる学問だということをばつきりと暴露した。

一九二二年第一一回党大会でレーニンは新経済政策第一年目の成果をふまえ、当面の課題すなわちさらにネット推進のため国家に資本主義的諸要素を導入し、配分体制普及についての課題を提起した。

同年一月第四回コミンテルンでレーニンは報告をし、労働者と農民が同盟したロシア勤労者階級は古いロシアから新しい社会主義的ロシアを建設すると言明した。⁽³²⁾

一方、彼の病状について言えば一九二二年四月、手術で銃弾の一つを摘出し、また同年夏ひどく病み、同一二月また病床に仆れたのだ。そして一九二三年三月中旬、健康状態とくに悪化でモスクワ近郊ゴルキに行く。一九二四年一月二日レーニンついに死す。指導者であり、先覚であったレーニンの死は強い衝撃として党の上に、ソビエト国家の人民大衆と全世界の勤労者の上に突如として襲いかかった。レーニンの葬儀の当日、国際労働者プロレタリアートは五分間目禱をすることを宣言した。全世界の勤労者はかれらの先達であり、もっとも親しい友人であり、庇護者であつた彼に深い悲しみの別れを告げた。⁽³³⁾

(注)

- (1) Большая Советская Энциклопедия, вт. изд. том. 24, Москва, стр. 493
- (2) Там же.
- (3) Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, Владимир Ильич Ленин, Изд. Полит. Лит., Москва, 1960
邦訳『レーニン伝』日共出版部上巻六頁
- (4) 青年時代はよく読書をし、見聞を広め、世相の矛盾を感じるなど、いわゆるインテリ家庭の青年としてのモデルコースの生長をしたようだ。Энциклопедия. Там же.; 『正伝』一六—二七頁を眼光紙背に徹することく参照のこと。
- (5) B. Wolfe, Three who made a Revolution, London, 1956, p. 87
- (6) Энциклопедия. Там же.
- (7) Там же. стр. 494
- (8) Там же.
- (9) Там же.
- (10) Там же. стр. 495
- (11) Там же.

- (12) Там же. стр. 496
- (13) レーニンに感動するほどたくさんペンネームをもっていた。七五以上の異ったペンネームで活躍し、その多くは明らかに無作為に選定されたイニシャルで構成された。R. Payne, *Life and Death of Lenin*, 1964, p. 147
- (14) Там же. стр. 497
- (15) Там же. стр. 498
- (16) Там же. стр. 502
- (17) Там же.
- (18) Там же.
- (19) Там же. 『正伝』下巻五三八頁
- (20) Там же. стр. 503 同前・五六三頁
- (21) Там же. 同前・五七〇頁
- (22) Там же. стр. 504
- (23) Там же.
- (24) В.И. Ленин, соч. Т.27, стр. 102, 120 邦訳『レーニン全集』(以下単に邦訳と略す)二七卷一二五、一四四頁
- (25) Энциклопедия, Там же. стр. 504
- (26) Там же. стр. 505 Л. А. Фотисва, Из жизни В.И.Ленина, Изд. Полт. Лит., Москва, 1967, 邦訳『フォティエフ回想録・レーニンの想ひ出の日』啓隆閣・一三八頁
- (27) Там же.
- (28) Там же.
- (29) Там же. стр. 506
- (30) Там же.
- (31) Там же. стр. 507
- (32) Там же. стр. 508

二、レーニンの宗教的態度

1、対宗教觀の形成

a 信仰放棄

彼の社会主義的宗教觀の形成は一般に三期に分れる。第一期は一九〇五年革命まで、宗教的問題について彼が関心を示してから、その政治的理論を展開するチャンスを持った時期である。第二期はそれ以後一九一七年革命まで、ここではロシアにおける革命的期待の退潮の中に反教権主義的主張と活動を展開し、ある意味では戦闘的なレーニンを最も特色づけた。第三期は大革命以後で、宗教について述べた彼の主張の實踐期⁽¹⁾と言えるし、また実質的政策形成者としてその貢献度は高く評価されよう。

まず、さいしょに、彼が宗教的問題について関心を示したのは何時ごろだろうか。

ウルフ Bertom D. Wolfe によればレーニンの信仰放棄の時期については諸説あるとする。彼の若き日の知人クラジヂヤノフスキー Кражижановский は、レーニンは一四歳のとき放棄した⁽²⁾と言い、アンナ Анна は父の死んだ秋、つまり一六歳のときとしている。あきらかにさいしょの死の直面が宗教教義への疑問につき当たったと見るべきだろう。……だが、いずれにしても宗教拒否の正確な時期の問題はレーニン自身がきめるべきことで、黨員の一人の質問に答えて一六歳のとき、と言っている。これはアンナの証言にも一致するし、⁽³⁾正しいものであろう。

またその経過につき、フオックス Roph Fox はレーニンの非宗教心の形成につき、科学の発展を通じて、人が未知の暗い砦を一つ一つ襲いはじめ、諸要素が膿を出し、問題それ自身の形態を変えはじめたとき、超自然（神わざ）をうけ入れ、かつ宗教と科学の妥協を試みる人々がまだいるということの奇怪を以上のなものでもないことを示した、科学書が彼をして啓蒙せしめたとするが、もちろんこのようなこともあったであろう。

またポッソネイ Stephen J. Posoney はさらにそれを詳しく説明して、レーニンは非信仰になることにより革命への道をさいしょに進むことになった。彼は一四歳のときチェルヌイシエフスキー Николай Чернышевский『何をなすべきか Что Делать?』を読んだ。しかし兄の刑死後たびたびこん度は熟読した。そこでレーニンは実際には非信心になったようだとしている。そして、科学書なるものはポッソネイが指摘したこれかどうかかわからないが、この影響もたしかに見逃せない。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

しめくくりとして、矢張り、前述ウルフの如く、それらを含めた社会環境が、彼をしてしからしめたと考えるのが妥当である。⁽⁷⁾

一八八六年と七年の二ヶ年間はレーニンにとって感じ易い青年期であり、しかも家庭生活環境が、社会的にも経済的にもコペルニカスの転回を迫られていたのであった。彼がいままで無意識に埋没していた支配イデオロギーの醜悪さに覚醒し、これになんらかの対処を心がけたとしてもそれは決して異常ではないだろう。

b 信仰の自由

このように彼のおかれた社会環境の激変から世の無情を感じ、一種の宗教的依存感を発生せしめる訳であるが、ここで一般の人々はある宗教に帰依することによって自己の苦悩を救済することが多いが、彼の場合は、既成宗教とそ

の宗教組織の支配イデオロギー的墮落化に着目して反宗教的になったことは注目すべきであろう。彼が帝政ロシアの支配権力の統治手段化した宗教組織、つまりギリシヤ正教組織の腐敗墮落は既存宗教から次第に離反せしめ、無神論的傾向そしてマルクス主義信奉へと移行してゆくのであるが、それが何時ごろかは確定できないが一八九一年春、大卒卒業検定試験に合格し、同年サマラで弁護士を開業するとともにマルキストとしての活動をはじめまでのあいだであったことはたしかである。⁽⁸⁾

このように彼の信仰放棄の経過は、宗教否定もさること乍ら、寧ろ既成宗教組織否定、つまり反教権主義的なことが特色であり、これは次のような論文にも良く示されている。彼は「貧農に訴える」(一九〇三)のなかで、宗教のあり方にふれ、……社会民主主義者はまた誰でもすぎな信仰をまったく自由に信ずる完全な権利を与えるよう要求している。⁽⁹⁾ヨーロッパ諸国のうちではロシアとトルコだけに、他の非正教信仰者に対する恥ずべき法律が残っている。これは一定の信仰を禁止しているか、その布教を禁止しているか、あるいは一定の信仰信者からある種の権利を奪っているとしこれはまことに不当かつ暴力的であり、人はだれもある信仰を信ずる完全な自由をもつばかりか、どんな信仰をひろめる自由、信仰を変える完全な自由を持つべきだと強調する。⁽¹⁰⁾

それゆえいっさいの宗教宗派が法律の前に平等であり、どの宗派も国家から経済的補助をうけるべきでない⁽¹¹⁾と主張した。

彼は宗教に対する懷疑から、宗教不信そして宗教拒否へと移行したが、この転換の大きな媒体となったのは右のように、帝政ロシア政府に癒着したギリシヤ正教組織が信仰の自由をけっきょくは阻害しているということであった。かくて、他の人の信仰ないし不信仰の自由のために闘わねばならぬ。

この見地から、彼は一八九五年「社会民主党綱領案」に信仰の自由とすべての民族の同権および信仰の如何を問はず二一歳以上のすべての市民による国民議会の召集¹²⁾としてかかげられたし、また一九〇三年同党第二回大会綱領草案にも、信仰、言論、出版、集会、ストライキ、結社の無制限な自由および身分の廃止と性、宗教、人種の差別なくすべての市民の完全な同権を主張し大会綱領に規定された。¹³⁾このように信仰の自由のために主張し、党活動の方針としてその超克のために闘った彼と雖どもギリシヤ正教の儀式に乗った婚姻の儀式は挙げたのである。いや挙行せざるを得なかったのである。彼は一八九九年七月一日クルプスカヤ Надежда Константиновна Крупская と流刑先の¹⁴⁾シュシェンスコエ Шувенское 村教会で婚儀を行なったことは帝政ロシア当局へのやむを得ぬ対応策であつたとは言え、たしかに一般には奇妙なこととして受けとれるのである。

いずれにしても、右の事情を含めて、次には既成の宗教および宗教組織が体制とどのような関係にあるか、そして何ゆえそこに至らしめたかを社会主義理論との対比において理論的に考察するに至るのである。

c 社会主義と宗教

レーニンの宗教にする基本的考え方は「社会主義と宗教 Социализм и Религия」(一九〇五)に集約表現されている。それは宗教の定義とそれへの対処の仕方に分れる。

前者において、それはある時代の社会的構造に対応する支配的なイデオロギーの一種であるとする。それぞれの時代にその経済的矛盾と歪曲の中に抑圧し、抑圧された人々を一樣に麻痺させる安っぽい火酒となる。たとえば資本主義時代の被搾取者たる労働者階級に対してはそれが来世での恩賞で慰め乍ら、現世の困窮と労苦に対して温順と忍耐を教えるし、搾取者たる資本家には貧者への慈善という名の優越感を味わせ、天国の平安への入場券を手頃な値段で

売りつけ、搾取という社会構造の矛盾に安っぽい弁解を提供する⁽¹⁵⁾とする。もちろん、ここで宗教とほんらいそれを信ずる信者の任意団体としての宗教組織とが必ずしも截然と区別されている訳ではないが、この主張は一面の真理を含んでいるよう。

次にそのような宗教および宗教組織に対してどのように対処すべきかであるが、彼によれば、このような宗教的ごまかし、宗教的晦渋から解放するためには、そして特に被搾取者たる労働者を来世の信仰から解放するためにはかれらに社会主義を導入し、この闘争のため労働者を覚醒させ、結末させることだ⁽¹⁶⁾としている。

つまり、レーニンは現代資本主義社会における宗教の根源としての資本家のかくれた暴力の恐れを強調した。彼は何世代にもわたってすべての宗教と宗教組織は支配者階級が被支配者階級を麻痺させ、そこで搾取をたすける反動機関の一つであると見た⁽¹⁷⁾。搾取階級のイデオロギー的武器の一つとしての宗教というレーニンの考えは、これをキリスト教について言えばその社会的原則についてのマルクスの初期の論法、つまり「ヘーゲル法哲学批評序説」のそれを基盤としている。

レーニンはもしその条件が成熟していないとしても、政治的経済的抑圧に敵対するうまい闘いの一つ的手段として、宗教的イデオロギーに対する積極的闘いの意識をできるだけ持つことの尊さを強調した⁽¹⁸⁾。すなわち、奴隷の状態を意識し、その解放のための闘いに立ち上った奴隷はもはや奴隷をなから抜け出した状態となった⁽¹⁹⁾……に示される如く、精神的奴隷からの解放は烈しい反教権的性格を保持するものである、と。

この論文が書かれた一九〇五年は西欧社会において、社会主義と宗教、無神論と反宗教プロパガンダの諸関係の問題が一般的論議の題材となった年であった。ロシアにおいては一九〇五年革命という特殊ロシア的事情において、さ

らにこの問題を真剣に考えさせることとなったのである、だから同年末彼はこの論文において宗教の上に前記のポリシェヴィキ態度ないしレーニンの立場をおしすすめた。⁽²⁰⁾

2、宗教闘争

a 国会のタクティク

彼が「宗教における労働者党の態度」(一九〇九)を書いた前後の事情について考えたい。当時国会で単一の社会民主主義派としてポリシェヴィキとメンシェヴィキが連帯していたときであったので、国会において、宗教問題についての戦時戦術に関してフラクシヨン内に漸次差異が発展していた。この問題について、全体としてメンシェヴィキは国会で戦闘的反宗教的立場をとることに消極的であり、同年、同派はボルシェヴィキに国会における宗務院予算を拒否する同派の演説草稿をもっと温健にするよう強要した。そこでレーニンは前記論文でこれに応じたものである。⁽²¹⁾

彼はそこで、西欧諸国の社会主義政党が、宗教は個人の私事であると宣言し、それにもとづく活動をしているからと言って、その猿真似をしてはいけないことをまず警告した。

西欧諸国のように近代化の過程である程度の政経分離が達成された社会的諸状況と、帝政ロシアのそれとは根本的に相違するものであり、それゆえ、わが党が宗教を私事と見なし、党としてのわれわれにとって宗教が私事であると考えるべきでなく、庶民大衆の真の信仰の自由を確保するため闘うべきで、宗教が私事であると主張するのは国家に⁽²²⁾対してであるとした。つまり、現在のロシア国家は、ほんらい宗教が個人各自の私事として処理するべきであるにも拘らず、制度的規制でこのような個人の権利が侵害されているから、労働者党はまず、それに対して闘わねばならないと主張したのである。卓見である。

彼はまた他の文で国会における宗務院予算関係審議をコメントしながら、戦闘的教権主義、ブルジョア反教権主義の上に彼の銃火を集中した。彼は国会聖職者多数によって代表される反動強化の上昇、一九〇五年革命以後の自治の弱化を説明し、聖職者と反動的階級は昂揚する革命的潮流に逆航するかれらの政治的組織を形成したとのべた。⁽²³⁾

ここで黒百人組などの国家における戦闘的教権団体は国家による干渉から教会の独立をかちとる欲求と、極端な権利の組織をもって、その法的精神的諸特権保持への努力で教会と協同した。⁽²⁴⁾ 他方、教会と黒百人組との同盟はブルジョア民主主義の妨害としてあるとした。黒百人組は無神論と社会主義の拡大により大衆のあいだにおける教会の威信低下を阻止するためつくられた組織で、レーニンはカデットやオクチャブリストによって代表されるブルジョア反教権主義より、もっと危険なものとした。

b 分派への闘い

ところで、一九〇五年革命の成果と言われたニコライ二世の立憲君主政の宣言も、それ以降次第に形骸化し反動的になってゆく訳であるが、他方、ストルイピン体制の確立化過程において、古い体制を維持しながらもロシアにおける諸経済は漸次経済破たんから立ち直りを見せていたので、革命的気運はいちじるしく退潮しつつあった。これはロシア社会民主党、とくにボリシエヴィキ派の活動に甚大な影響を及ぼさずにはおかなかった。党がこの状況に如何に戦術的に対処すべきかにつき意見が岐れ、解党派 *Ликвидатор* 召還派 *Орowanen* 前進派 *Брепедов* などの分岐はまさに四分五裂であった。

また宗教に対する態度についても求神主義 *Боронкареильство* や建神主義 *Боростроительство* の攻勢に悩まされた。かくて、党は崩壊の危機にさらされていた。求神主義とは主として社会民主主義者以外の人たちによる宗教攻勢

であり、社会主義理論の追求と実践に既成宗教の依存が可能だとする説で、かつての合法マルクス主義者のベルジャエフ H. A. Бердяев、ブルガコフ C. H. Бугаков、メレジコフスキー Д. Мережковский、ギャンツマン 3. Гиппиус、ミンスキー Н. Минский、フィロソフ Д. Философов などが唱えたもので、多数の新聞、雑誌を利用して、一九〇五年革命後の大衆のあいだに広く普及し生活のあらゆる面に滲透したものであった。また建神主義は主として社会民主主義者の中に発生した理論で、これは社会主義と宗教の共存の可能性を主張する点では前者と同じであるが、ただその神は既成の、在来⁽²⁶⁾の神は依るに足らぬからわれわれ自身が起すべきであるという点でことになったものであり、それが進歩的表現だと主張するもので、ルナチャルスキー A. B. Луначарский、ボグダノフ A. A. Богданов、バザロフ P. B. Базаров などが唱え⁽²⁷⁾、これも党および一般に非常な影響を与えたのである⁽²⁸⁾。

これに対し、レーニンは「唯物論と経験批判論」(一九〇八)をはじめとして多くの論文のなかで神とか神に関する人々の理解、判断力は大衆と同じ無知蒙昧さであり、大衆の意識の発展を妨げ、分別を失わせ、けっきょくは搾取者の利益に奉仕するものであることを根気よく説いた。⁽²⁹⁾

彼はこのときの苦しみを一九〇八年二月二五日付ギリキー宛の手紙に託した。⁽³⁰⁾

3、宗教的残存物の克服

a 国教分離

一〇月革命の成功により、社会民主主義者が長い間、闘争のプログラムとして主張してきたものを実践する段階になった。これを宗教に関して言えば、国家から教会、教会から学校の完全分離であった。これらは前述の如くレーニンにより第一回 РСДРП 綱領案として盛られ、同第二回大会で採択されていたものであった。まことに、国家は宗

教に対して私事でなければならないのではなく、宗教組織は国家権力との関係において私事でなければならないのである。⁽³¹⁾このような国家から教会の完全分離こそ現代国家と教会に対して社会主義的プロレタリアートが提起した諸要求であり、ロシア革命はこのような形で信仰の真なる自由を内実とするこれら要求を実現すべきである。なんとなければいままでの教会は搾取の道具として、警察的ギリシヤ正教官庁として大衆を無知蒙昧にさらす専制政治を行なってきた。⁽³²⁾

かくて一〇月革命後ロシア民族の物質的条件を根本的に変革し、したがって既成宗教と宗教組織にも当然に決定的打撃をもたらした。⁽³³⁾革命は巨大な資本主義的所有者であり企業家でもあった教会の諸特権を留保することができなかった。革命政権は国教分離に関する諸施策を断片的に施行してきたが、これについての統一的布告制定の必要性から特別委員会を設置して審議した。⁽³⁴⁾レーニンはその作業を注意深く見守り、準備された原案に個人的に校訂を加えたものが一九一八年一月二三日布告されたのである。これはいまでも宗教に関するソビエト政権の重要な布告として残っている。

ヤロスラウスキー E. M. Спостаскин はこれについてレーニンの「社会主義と宗教」を引用しながら、この論文と国教分離布告文を対照する必要があるとし、それは一九〇五年にのべたことと一九一八年具体化したことと充分類似しているばかりか、同様でさえあった⁽³⁵⁾としているが、基本的に一致していることはたしかで、ここに彼が長年主張しつづけた要求を具体的政策として実現できたことになったのである。

b 宗教的偏見

国家から教会の完全な分離は、しかしながら生易しいものではなかった。それは長年国家の保護に馴れた宗教組織

とその聖職者にとっては既得権に対する重大な侵害であった。当然、聖職者が関与しない反ソ的陰謀のほとんど一つさえもなく、聖職者の煽動によるソビエト政権への反抗は流血の衝突をしばしば招いた。⁽³⁶⁾これは宗教的偏見を矯正する方策としてはまことに工合の悪い事態であった。このような状況のもとで、宗教的偏見にどのように対処するかが政策実施段階での大きな課題となるのである。

宗教的偏見への対処の仕方を説いたものとしては彼の「婦人労働者第一回全ロシア大会での演説」(一九一八)が有名である。

ここで彼は社会主義理論の説得を急ぐのあまり、相手方の宗教的感情を侮辱するようなことがあってはならぬと戒心している。⁽³⁷⁾

これは非常に利口な言い方であり、宗教というものが弱き者、虐げられた者、つまり資本主義社会では労働者の中にヨリ多く布教されているとしたら、それへの侮辱は労働者間にけっきょくは無用の対立、誤解を助長させることになるので得策でないばかりか、宗教への忠誠、殉教を美化させるに役立つだけである。反ってマイナスの効果だけしかあらわれないから、宗教が枯死するよう気長に説得すべきことを説いたのである。だがこの説がもつとはっきり示されているのは「宗教に対する労働者党の態度について」(一九〇八)である。

彼はその中で反宗教闘争の慎重性についてのエンゲルス「反デューリング論」を引用しながら、労働者に緊要な政治闘争に宗教上の分裂をしだすことを恐れていた。⁽³⁸⁾

まずなすべきことは現代資本主義諸国では資本主義制度の歪曲、矛盾が勤労大衆を抑圧し苦悩させそれが宗教存在の⁽³⁹⁾もつとも大きな社会的根源であることを気長に、あせらず説明することであるとす。

同様のことは「社会主義と宗教」（一九〇五）の中にも……古い偏見のあれこれの残存物を保持しているプロレタリアに、われわれの党と接近することを禁じていないし、また禁じてはならないのである。われわれは常に科学的世界観を宣伝するであらうとして（⁴⁰）いるところを見ると宗教的偏見に対して「暴力でねじ伏せる愚」を戒めていたことはずっと以前からの彼の主張であった訳だが、政権掌握以後の宗教政策実践段階期ではまさに焦眉の急の課題になったのである。それゆえレーニンのこの時期における宗教的関心はもっぱらこの点に注がれることになる。そしてまた新政権批判と宗教的偏見にもとづく反ソ的行動が截然と区別できないケースが多かったことが政権当局者とくにレーニンをして頭を悩ませたことであつた。

彼がこの時期これに深い関心を寄せたことは宗教関係の共産党綱領によく示される。

すなわち、一九一九年第八回党大会へ向けての綱領草案の中に、……党は搾取階級と宗教宣伝団体との結びつきを完全に破壊すること、および勤労大衆を宗教的偏見から現実解放することを目指し、このためにもっと広汎な科学的啓蒙的宣伝と反宗教的宣伝を組織する。このばあい信仰を持つ者の感情を侮辱することは宗教的熱狂を高める結果になるだけであるから、そのようなことは細心の心づかいをしていっさい避けねばならぬ（⁴¹）としてその対処の仕方につき非常な配慮をしており、この草案は同大会で綱領として採択されたのである（⁴²）。

つまるところ彼は宗教への憎悪からあまりにも過激な手段で宗教と闘うことは宗教廃絶という目的の遂行にとって不利益であると考え、いかなる宗教、教会に対するあらわな嫌悪の感情を吐露することを禁止し、この遂行は徐々に行なうべきであるとした（⁴³）。つまり宗教への闘いは人間個人主義の支持として見られるであらう（⁴⁴）。

しかし、レーニンのこのような宗教への配慮が現実の政策として徹底したかどうかはなはだ疑わしかった。周知

の如く革命初期の政権は必ずしも地方ソビエトを掌握してはいなかったし、その指令が徹底を欠き、ないし誤って解釈される危険も多分に存したのである。つまり、反ソ的陰謀の多くは聖職者およびそれを中心とする団体によってなされたとき、それに対する弾圧が宗教弾圧と中傷される確率が多かった。レーニンもこの両者を識別する良策を具体的に示すことがなかった。

(注)

- (1) Bohder B. Vociurkiw, Lenin and Religion,—in L. Schapiro ed., Lenin, The man, the Theorist, the Leader a reappraisal, London, 1967, p. 107
- (2) Shub David, Lenin, 1945, p. 36
- (3) Bertram D. Wolfe op. cit. p. 77
- (4) Rarl Fox, Lenin, 1933, p. 160
- (5) Stephen T. Rossoney, Lenin, the compulsive revolutionary, chicago, 1964, p. 17
- (6) Vociurkiw, op. cit. p. 110
- (7) B. Wolfe, op. cit. p. 27
- (8) 『正統』七卷三〇〜三四頁
- (9) В. И. Ленин, соч. Т. 6, стр. 366 邦訳六卷四一四頁
- (10) Там же. 同前
- (11) Там же. стр. 367 邦訳四一五頁
- (12) Там же. Т. 2, стр. 79 邦訳二卷八一頁
- (13) Там же. Т. 6, стр. 15 邦訳六卷一六頁
- (14) С. И. Никишов, Ленинская Критика Философских основ Религии, Москва, 1968, стр. 141
- (15) В. И. Ленин, соч. Т. 10, стр. 65 邦訳一〇卷六〇頁

- (16) Там же, стр. 66 邦訳・同前・七一頁
- (17) Воспитіw, op. cit., p.109
- (18) ibid, p. 110
- (19) В. И. Ленин, соч. Т. 10, стр. 66 邦訳一〇卷七〇頁
- (20) Воспитіw, op. cit. стр. 116
- (21) ibid, p. 110
- (22) В. И. Ленин, соч. Т. 15, стр. 373 邦訳一五卷三九四頁
- (23) Воспитіw, op. cit. p. 120
- (24) ibid.
- (25) ИФАН СССР, Философская Энциклопедия, том 1, Москва, 1960, стр. 178
- (26) Никишов, Там же, стр. 114
- (27) Философская Энциклопедия, Там же, стр. 179
- (28) Никишов, Там же, стр. 116
- (29) Там же, стр. 115
- (30) В. И. Ленин, соч. Т. 13, стр. 411 邦訳一三卷四六頁
- (31) Никишов, Там же, стр. 309
- (32) М. М. Персиц, Отделение Церкви от Государства и Школы от Церкви в СССР, Москва, 1958, стр. 6
- (33) Никишов, Там же, стр. 310
- (34) Там же ; В. Ф. Зыбковец, Программные Положения КПСС в Борьбе против Религий-в кт., Вопросы Истории Религии и Атеизма, сб. XI, Москва, 1963, p.30
- (35) Е. М. Ярославский, О религии, Москва, 1957, стр. 302
- (36) Никишов, Там же.
- (37) В. И. Ленин, соч. Т. 28, стр. 161 邦訳二八卷一八七頁

- (38) Tam же. T. 15, стр. 373 邦訳一五卷三九四頁
- (39) Tam же. стр. 375 邦訳・同前・三九六頁
- (40) Tam же. T. 10, стр. 69 邦訳一〇卷七四頁
- (41) Tam же. T. 29, стр. 114 邦訳二九卷一一〇頁
- (42) ЦК КПСС, Бюро ЦК ЦСЗР РКП(б) 1919, Ипорозим, Москва, 1959, стр. 402
- (43) George Vernadsky, Lenin, Red Dictator, New-York, 1961, p. 325
- (44) G. Vernadsky, op. cit. p. 326 なお一九一八年モスクワで若いバレーリナ之死にさいし、故人の遺族の希望による宗教的儀式の葬儀に寛大な措置をとったレーニンの態度は宗教的偏見への対処として注目される Angelica Balabanoff, Impression of Lenin, Chicago, 1964, pp. 52~53

おすび

レーニンはその全生涯をツァーの専制政治の迫害とその体制下の特殊ロシア的な資本主義の弊害からロシアの労働者農民を解放する仕事に、またその特殊な資本家、地主体制から社会主義社会建設への任務にすべてを捧げたのである。

同時に彼の宗教観はそのような体制に癒着したギリシヤ正教とその宗教組織から労働者と農民の真実の信仰の自由を求めるにあり、そのため、国家と教会の完全な分離を企てたのである。彼は革命後、永年堅持したこの理念を実現したが、そこにおいても信仰の自由を守るための闘いは、未だそれを信じている、信者の感情を傷うことのないような配慮がなされた。暴力でなく説得によることが宗教と闘う唯一の道であることを示した点はやはり偉大であると言えよう。

(了)

(附) ヲリン匹の集生

——張翊・蔡倫・蔡邕の集生——

- (1) Что такое “друзья народа” и как они воюют против социал-демократов?, 1894, Т. 1, стр. 159, 194-301
- (2) ★Объяснение программы, 1896, Т. 2, стр. 87
- (3) Новый фабричный закон, 1897, Т. 2, стр. 288~293
- (4) Развитие капитализма в России, 1899, Т. 3, стр. 547~548
- (5) ★Проект программы нашей партии, 1899, Т. 4, стр. 228
- (6) Китайская война, 1900, Т. 4, стр. 379~383
- (7) Внутреннее обозрение. IV. Две предводительские речи, 1901, Т. 5, стр. 335~342
- (8) Беседа с защитниками экономического, 1901, Т. 5, стр. 363
- (9) Что делать?, 1902, Т. 6, стр. 70~71, 114~115
- (10) Политическая агитация и классовая точка зрения, 1902, Т. 6, стр. 264~270
- (11) Из экономической жизни России, 1902, Т. 6, стр. 282~283
- (12) Московские зубатовцы в Петербурге, 1903, Т. 7, стр. 83, 86~87
- (13) Самодержавие колеблется, 1903, Т. 7, стр. 123~128
- (14) К деревенской бедноте, 1903, Т. 7, стр. 146~147, 172~173, 193~194, 196~197
- (15) Речь о газете “Рассвет”, 1904, Т. 8, стр. 441
- (16) ★Революционные дни. Поп Гапон. Царь-батьюшка и баррикады, 1904, Т. 9, стр. 210~211, 216~219
- (17) Должны ли мы организовать революцию, 1904, Т. 9, стр. 272
- (18) Социал-демократия и временное революционное правительство, 1905, Т. 10, стр. 13
- (19) Третий съезд, 1905, Т. 10, стр. 218
- (20) Наши задачи и Совет рабочих депутатов, 1905, Т. 12, стр. 67~68
- (21) ★Социализм и религия, 1905, Т. 12, стр. 142~147

- (22) Доклад на Объединительном съезде РСДРП, 1906, Т. 13, стр. 28~29
- (23) Проект речи по аграрному вопросу во II Государственной Думе, 1907, Т. 15, стр. 156~157
- (24) Аграрная протрамма социал-демократии в первой русской революции, 1905~1907 годов, 1907, Т. 16, стр. 362~366, 372~373, 375~377
- (25) О природе русской революции, 1908, Т. 17, стр. 12~13
- (26) Марксизм и ревизионизм, 1908, Т. 17, стр. 17, 19~20
- (27) Лев Толстой как зеркало русской революции. 1908, Т. 17, стр. 206~213
- (28) Аграрные прения в III Думе, 1908, Т. 17, стр. 310~311, 315~316, 319
- (29)★Об отношении рабочей партии к религии, 1909, Т.17, стр. 415~426
- (30)★Классы и партии в их отношении к религии и церкви, 1909, Т. 17, стр. 429~438
- (31)★Материализм и эмпириокритицизм, 1908, Т. 18, стр. 9~378
- (32) Совещание расширенной реакции “Пролетария”, 1909, Т. 19, стр. 19~20, 41~42
- (33) Ликвидация Ликвидаторства, 1909, Т. 19, стр. 47~48, 50
- (34) Поездка царя в Европу и некоторых депутатов в Англию, 1909, Т. 19, стр. 55
- (35) О фракции сторонников отзовизма и Богостроительства, 1909, Т. 19, стр. 74, 89, 96~97
- (36) Позорный провал, 1909, Т. 19, стр. 131~133
- (37) Приемы ликвидаторов и партийные задачи большевиков, 1909, Т. 19, стр. 145
- (38) Басня буржуазной печати об исключении Горького, 1909, Т. 19, стр. 153
- (39) О вехах, 1909, Т. 19, стр. 167~175
- (40) О фракции “передовцев”, 1910, Т. 19, стр. 318
- (41) Л. Н. Толстой, 1910, Т. 20, стр. 19~24
- (42) Л. Н. Толстой и современное рабочее движение, 1910, Т. 20, стр. 38~41
- (43) Толстой и пролетарская борьба, 1910, Т. 20, стр. 70~71

- (44) Л. Н. Толстой и его эпоха, 1911, Т. 20, стр. 100~104
- (45) Наши упразднители, 1911, Т. 20, стр. 129
- (46) Демократия и народничество в Китае, 1911, Т. 21, стр. 406
- (47) Либералы и клерикалы, 1911, Т. 21, стр. 469~470
- (48)★Духовенство и политика, 1912, Т. 22, стр. 80~81
- (49)★Духовенство на выборах и выборы с духовенством. 1912, Т. 22, стр. 129~132
- (50) Социальное значение сербско-болгарских побед, 1912, Т. 22, стр. 186~187
- (51) К вопросу о рабочих депутатах в Думе и их декларция, 1912, Т. 22, стр. 204
- (52) Итоги выборов, 1913, Т. 22, стр. 319~321
- (53) Что делается в народничестве и что делается в деревне? 1913, Т. 22, стр. 365, 366~368, 368~369
- (54) Три источника и три составных части марксизм. 1913, Т. 23, стр. 43~44, 47~48
- (55) Спальные вопросы, 1913, Т. 23, стр. 79~80
- (56) К двадцатипятилетию смерти Иосифа Дицгена, 1913, Т. 23, стр. 117~120
- (57) Организация масс немецкими католиками, 1913, Т. 23, стр. 188~190
- (58) Пятый международный съезд по борьбе с проституцией, 1913, Т. 23, стр. 331~332
- (59) Национализация еврейской школы, 1913, Т. 23, стр. 375~376
- (60) Классовая война в Дублине, 1913, Т. 23, стр. 400~402
- (61) Как епископ Никон защищает украинцев? 1913, Т. 24, стр. 8~10
- (62) Резолюция летнего 1913 года совещания Цк РСДРП, 1913, Т. 24, стр. 57~59
- (63) Критические заметки по национальному вопросу, 1913, Т. 24, стр. 119~123, 133~134, 143~144
- (64) Сиятельный либеральный помещик о "новой" земской России, 1914, Т. 24, стр. 316~319
- (65) Политические споры среди либералов, 1914, Т. 24, стр. 346~348
- (66) Еще одно уничтожение социализма, 1914, Т. 25, стр. 34~54

- (67) Приемы борьбы буржуазной интеллигенции против рабочих, 1914, Т. 25, стр. 322
- (68) О “передовцах” и о группе “Вперед” 1914, Т. 25, стр. 355
- (69) Положение и задачи социалистического интернационала, 1914, Т. 26, стр. 41
- (70) Карл Маркс, 1914, Т. 26, стр. 51~53
- (71) Один немецкий голос о войне, 1914, Т. 26, стр. 94~95
- (72) О национальной гордости великороссов, 1914, Т. 26, стр. 107~108
- (73) Крах II Интернационала, 1915, Т. 26, стр. 236~237
- (74) О поражении своего правительства в империалистической войне, 1915, Т. 26, стр. 290~291
- (75) Социализм и война, 1915, Т. 26, стр. 330
- (76) О лозунге Соединенных Штатов Европы, 1915, Т. 26, стр. 352~353
- (77) К вопросу о диалектике, 1915, Т. 29, стр. 316~322
- (78) Империализм, как высшая стадия капитализма, 1916, Т. 27, стр. 306
- (79) Письма из далека, 1917, Т. 31, стр. 51
- (80) Государство и революция, 1917, Т. 33, 76~77
- (81) ★Речь на I Всероссийском съезде работниц 19 ноября, 1918 г., 1918, Т. 37, стр. 185~187
- (82) Доклад на II Всероссийском съезде профсоюзов, 1918, Т. 37, стр. 449~450
- (83) ★Проект программы РКП(б), 1919, Т. 38, стр. 95, 118
- (84) VIII съезд РКП(б), 3, Доклад о партийной программе, 1919, Т. 38, стр. 158~159
- (85) О погромной травле евреев, 1919, Т. 38, стр. 242~243
- (86) О государстве, 1919, Т. 39, стр. 66~67
- (87) Указания о работе агитационно-инструкторских поездов и пароходов, 1919, Т. 49, стр. 72
- (88) Детская болезнь “левизны” в коммунизме, 1920, Т. 41, стр. 10, 42, 86
- (89) Тезисы ко II конгрессу коммунистического Интернационала, 1920, Т. 41, стр. 166~167

- (6) Задачи союзов молодежи, 1920, т. 41, стр. 307~313
 - (16) Замечания на проекте решения ЦК о задачах РКП(б) в Туркестане, 1920, т. 41, стр. 436
 - (26) IX Всероссийский съезд Советов, 23~38 декабря, 1921, т. 44, стр. 333
 - (36) О значении воинствующего материализма, 1922, т. 45, стр. 23~33
- (備考)
- a これはレーニン全集(第五版)から宗教、教会、無神論關係をリスト・アップしたもの。この作成にさいして АОН ЦК КПСС под. Ю. П. Францева, В. И. Ленин об атеизме, религии и церкви, Москва, 1969 を参考にした。
 - b ただし手紙、電報の類いは省略した。
 - c ★印はとくに重要な著作である。